
遊戯王GX 闘龍の記憶

ラングレー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX 闘龍の記憶

【Nコード】

N24340

【作者名】

ラングレー

【あらすじ】

ふと気が付くと、遊戯王GXの世界に紛れていた主人公。元の世界から持ち込んだ切り札、そして仲間達と共に迫り来る驚異からこの世界を守るために戦う。

(この小説には、遊戯王に関する自己解釈、独自設定が存在します。また、超展開や原作キャラ変更をすることも有ると思います。それでも構わないという方のみ御覧ください。)

プロローグ ある少女の記憶（前書き）

はじめまして、ラングレーです。

初投稿、というよりも初執筆の小説です。

どうか、温かい目で見守っていただきたいと思います。

プロローグ ある少女の記憶

……

……

………「じいじはぶじい？」

あたしは、どうしたの？

死んだ？

あたしは、死んだの？

何でそんな風に考えるんだろ。
ただまわりがまっくらなだけじゃない。
ただそれだけ……。

でも……、
何だか気持ちが悪い。

あたまがボーッとしてる。
いつもみたいにはつきりしない。
ただ、気分はよくない。

何となくわかる。
ここはいてはいけない場所。

どうしてあたしはここにいるの？
やっぱり死んじやったのかな、
あたし……。

まだやりたいことはあるのに。
まだやってないことはあるのに。
まだしてほしいことがあるのに。
あいつに……。

悲しい。
本当にあたしは死んでしまったの？

そんな事はない。
あたしの身体はちゃんと見えてる。
怪我なんてない。
何処も痛くない。
大丈夫、あたしは生きてる。
生きているはず。

とりあえず、ここから出よう。
ここは何処だろう
もしかして、夢の中？

腰のデッキホルダーが光ってる。
どうしたの？
ホルダーを手にとる。
光っているのは、ホルダーじゃなく中のカード。
ホルダーを開けてみる。
光っているのは、やっぱりこの子。

目の前に龍が現れる。
大きい。
龍は顔をむけてくる。

あたしくらいの大きさなら、きっと丸呑み出来るだろう。
でも、怖くない。

あたしは、この子を知ってる。

あたしにはわかる。

龍が背に乗れと促す。

あたしはそれに従う。

あたしが乗ると、龍は羽ばたく。

あたしが感じたことの無い速さで飛ぶ。

心地良い。

大きな背中。

守られてる。

ふと気が付くと、辺りが白んでいる。

やっぱり夢か。

ほっとしたような、残念なような。

もっと背中に乗っていたかった。

でも、しかたない。

ずっと寝てはいられない。

龍は速度を落とす。

お別れのつもり？

でも……。

「行って、もっと速く！」

龍を促す。

龍は再び速度を上げる。

そう、これでおわりなら、

最後まで背中居させて。

速い。かつて無いほど。
前を見る。

白く、太陽みたく輝いている。

あの中に入れば、あたしは夢から覚めるだろう。
なら、最後まで！

「行って、ブルーアイズ！」

視界が真白くなる。

もうなにもわからない。

……。

多分、ねぼけてるんだろ。

……。

起きたらなにしようかな？

.....。

じゃあ、またね……。

第一話 余興（前書き）

第一話の投稿遅くなりすぎました。と言うよりもあまり時間がありません。

本文もめちゃくちゃです。

第一話 余興

・デュエル・アカデミア
・オシリス・レッド学生寮前にて

「おい、起きろよトーマー！」

うるさい…。

「耳元で叫ばないでくれよ。」

「だって、普通に起こしてもぴくりともしないじゃんお前！」

「だからといって叫ばなくてもいいじゃないか。ほら、みんなお前を見てるぞ。」

「気にすんなって！そんな事より、デュエルしようぜ！」

そんな理由で俺の惰眠を妨げたコイツは遊城十代。遊戯王GXの主人公だ。

入学試験デュエルの後に話しかけてみたら、いたく気に入られてしまったようで、デュエルアカデミア行きの船の中では数時間ぶっ続けでデュエルさせられた。そして実の無い校長の挨拶、解放されたと思っていた矢先にこれだ。

アニメは少しずつだが見ていたので、キャラクターの性格も大体知っている。上手くあしらえると思っていたのだが…。

「わかったから叫ばないでくれ。耳が痛い。」

そして周りの視線が痛い。一年生の歓迎会の途中だったのにこのデュエル馬鹿は。

「いいじゃんか。減るもんじゃ無いし。」

見れば周りに人が集まっている。やっぱりみんなデュエル好きなのか。

「ほーら見るよ！みんな集まってるし、さっさと始めようぜ！」

「…しかたないな。」

「おや、デュエルですかニヤァ？」

妙な語尾を付けて喋るこの人はたしか、大徳寺先生。オシリス・レッドに入学した俺達にとっては、まあ担任のようなもんか。

「じゃあデュエルの前に、自己紹介代わりにお互い名を名乗って欲しいニヤァ。」

「おう！俺は入試番号110番、遊城十代だ。よろしく！」

周りから驚嘆の声。成る程、入学デュエルで実技担当教員を倒した十代は、すでにアカデミアの有名人と言っことか。

「俺は入試番号83番、金谷東馬。十代、やるからには本気で行くぞ！」

「いいデュエルにしようぜ。」

「「デュエル！」」

第一話 余興（後書き）

デュエルは次回

遊戯王GX主人公の十代VS闘龍の記憶主人公の東馬です。

第二話 力の差？（前書き）

遅くなりました。
長くなりました。

それでは本編へどうぞ。

第二話 力の差？

「デュエル！」

十代：LP4000

東馬：LP4000

「先攻は貰うぜ！ドロー！俺はE・HERO フェザーマンを召喚
！」

E・HERO フェザーマン ATK 1000

エレメンタル・ヒーロー。遊城十代の代名詞とも言えるモンスター群。優秀な下級モンスターでアドバンテージを稼ぎながら簡単に強力な融合モンスターで場を制圧する事ができるので、元の世界でも人気のあるテーマだ。

「カードを一枚伏せる！」

とはいえ、この頃はまだヒーローの黎明期で、実践レベルのテーマではないはずだ。

「ターンエンド！」

「俺のターン。カードドロー。」

「俺は、モンスターをセットしターン終了。」

少し手札事故を起こしているが、なんとかで時間を稼いで、今手札にある《ダーク・アームド・ドラゴン》に繋げる事さえ出来れば勝機はあるだろう。

「俺のターン、ドロー！マジックカード、《強欲な壺》を発動！カードを二枚ドローする！」

「そして俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《E・HERO スパークマン》と《E・HERO ネクロダークマン》を融合！」

来るか！

「来い！《E・HERO ダーク・ブライトマン》！さらに《融合回収》を発動！墓地の《融合》と《E・HERO スパークマン》を手札に戻す！」

E・HERO ダーク・ブライトマン ATK 2000

「また融合を!?!」

「行くぜ！再び《融合》を発動！手札の《E・HERO バーストレディ》と場の《E・HERO フェザーマン》を融合し、現れる！《E・HERO フレイムウイングマン》！さらに墓地のネクロダークマンの効果で手札の《E・HERO エッジマン》を召喚！」

E・HERO フレイムウイングマン ATK 2100

E・HERO エッジマン ATK 2600

「な……!?!」

攻撃力2000オーバーのE・HEROが三体……。

本来、E・HEROは展開力が高く、このような展開も十分に有り得た。しかし、船の中で十数回戦ったが、三ターン目にここまで展開することは無かった。それゆえ俺は十代のデッキはあまり速くないものだと思っていたのだが。

「行くぞ！エッジマンで守備モンスターを攻撃！パワー・オブ・フイスト！」

東馬 LP:4000 3500

セットされていた《黒曜岩竜》が破壊され、墓地へ送られる。

「続けてフレイムウイングマンでダイレクトアタック！フレイム・シュート！」

「ぐあつ?!?!」

東馬 LP：3500 1400

「……この瞬間、手札の《冥府の使者 ゴーズ》の効果発動！このカードは自分フィールドにカードが無い時に自分へのダメージが発生した場合、手札から特殊召喚できる！」

冥府の使者 ゴーズ ATK 2700

「何だつて！」

「さらに受けたダメージが戦闘ダメージならば、そのダメージ量と同じ攻撃力・守備力をもつ《冥府の使者 カイエントークン》を特殊召喚できる！」

冥府の使者 カイエントークン ATK 2100

「そいつすげえな！俺のターン中なのに！」

元の世界ではよく見るカードではあるのだが。

「だがまだまだ！ダーク・ブライトマンでカイエントークンを攻撃だ！ダーク・フラッシュ！」

「クソッ、反撃だ！」

十代：LP 4000 3900

「ダーク・ブライトマンはカイエンより攻撃力が低いため破壊される。だがダーク・ブライトマンが破壊された時、相手モンスターを一体破壊できる！俺はゴーズを破壊！」

「クソッ！ゴーズが……！」

だが、十代のモンスターは攻撃を終了した。返しのターンでダムドを召喚して……

「安心してみたいけど、次のターンは無いぜ！」

「何！？」

そうやって十代は手元のリバーズ発動ボタンを押す。確かあれば、

最初のターンに伏せた……。

「リバースカード、オープン！《ヒーロー逆襲》！お前は俺の手札をランダムに選び、そのカードがE・HEROならば、相手モンスター一体を破壊し、選ばれたモンスターを場に出す！」

アイツの手札は一枚。確か《融合回収》で手札に戻した《E・HERO スパークマン》……。

「俺の、負けか……。」

「スパークマンを特殊召喚し、カイエントークンを破壊！」

「いけえ！スパークマンで東馬にダイレクトアタック！スパークフラッシュ！」

東馬：LP 1400 0「……バトルフェイズ！ゴーズでエッジマンを攻撃！」

十代：LP 4000 3900

第二話 力の差？（後書き）

主人公の東馬くんには負けてもらいました。

私ラングレーとしましては、主人公の成長ものを書きたいと思っています。

東馬くんにはもう少し負けてもらう事になります。

第三話 独り言（前書き）

前半はほとんどつづきです。
あまり詳しく読まなくても構いません。

第三話 独り言

「…………むう。」

華麗にワンショットキルを決められてからおよそ三時間。俺は部屋に入り、さっきのデュエルで使用したデッキを確認している。

「大丈夫なはずなんだけどな……」

十代は三体の高級モンスターを1ターンで展開して見せた。ギヤラリーがざわめいていたので、こちらの世界では非常に珍しい事なのかも知れない。しかし、このデッキはそれ以上の展開や除去への耐性があるはずだった。むこうの世界では公式の大会にこそ出していないが、それなりに大きいカードショップの大会で優勝した事もある。

「カードが足りないのか？」

このデッキは元々シンクロ召喚のギミックが積まれていた。しかし、こちらへ来る時、正確にはこの世界に来たと理解した時にはデッキホルダーからシンクロモンスターが消えていた。盗まれたのだと思っていたが、今考えてみると、かなりオーバースペックのカードを持ち出すな、という戒めなのだろう。

思考が反れてしまった。つまり、俺が持ち込んだのは、40枚のメインデッキ、15枚のサイドデッキのみ。メイン投入されていたシンクロギミックのカードは計9枚で、その一部分をサイドデッキのカードで補完している。

「…………そりゃ回る訳が無いか。」

しかし、そんなに相性が悪いカードを入れた訳では無いのだが…………。

(カチャッ。)

?

ドアの音?

「十代か?」

十代は俺の隣の部屋にいる。今の音は確かに十代の部屋から聞こえてきた。

「何してんだ?」

「!!!!!!」

十代と横にいる翔が、こっちを向いて固まっている。

「……なんだ、脅かすなよ……。」

だが、声の主が俺だと理解して警戒を解いたようだ。

「こんな時間に何処へ行く気だ?」

「オベリスク・ブルーの奴に呼び出されたんだ。デュエルしようぜつてな。」

「こんな時間に非常識な……。」

「そんな気楽なもんじゃないツスよ!互いのベストカードをアンテイしろって言われてるのに!東馬くんも止めて欲しいツス!」

成る程、さっきの事と言い、十代はかなりの「有名人」らしいな。

「俺も行くこう、十代。」

「何言い出すんスカ!」

「デュエルするのは十代なんだから?興味があるしな。」

「よし、そうと決まればさっさと行くこうぜ!」

「ああ!」

「待つてよ二人ともー!」

そして三人はアカデミア校舎の方へ駆け出して行った。

第三話 独り言（後書き）

翔との出会いは入学デュエル時。
三沢にも会っています。

第四話 エリートの戯れ（前書き）

とりあえず、万城目との出会い？です。

第四話 エリートの戯れ

「つと…。」

十代の後について走っていた俺は、途中で自分が何処へ向かっているのかわ知らされていない事に気付いた。

「ここか？」

「ああ、この向こうだ。行くぜ…。」

ドアは自動で開き、中に入った俺の目に入ったのは、巨大な皿のようなデュエル・リングに、やたら広い観客席だった。

「デュエル場か…。」

デュエル・リングの上には、十代を呼び出したのであろう青い制服の三人がいる。

「クク…、よく来たな、ドロップアウト。」

中心格らしい男が話しかけてくる。アイツは確か…。

「万城目。万城目 準。」

「東馬くん、あの人のこと知っているんスか？」

「ほう、俺の事を知っているのか。」

アニメはあまり見ていなかったが、主要キャラクターの一人だ。しかし、こんなに傲慢な奴だったか？

「そつちの奴らよりは殊勝な心掛けじゃないか。」

「猿山の大将は目立つからな。」

「！」

「キサマ！万城目さんになんてことを！」

横にいる奴がうるさい。

「そんな事より、デュエルするんだろ。ならさっさと初めようぜ！」
「…フン、いいだろう。ルールは解っているな。」

「互いにデッキのベストカードをアンティにして、負けたらそれを相手に渡す。」

「解っているならそれでいい。行くぞ！」
「デュエル！」

夜中のデュエル場の真ん中で、十代と万城目のデュエルが始まる。

「始まったな…。」

「おい、キサマ！」

万城目の横で何か叫んでいた奴だ。

「俺か？」

「キサマの態度を改めさせてやる！デュエルだ！」

少し考える。ここはデュエル受けてコイツの態度を改めさせたところだ。

しかし唯一のデッキは現在調整中で、仮にもオベリスク・ブルーであるコイツとのデュエルではあまり使うのはあまりに無謀と言うもの。

「少し待ってくれ。デッキの調整が終わってない。」

とりあえず戦える状態にするため、デッキを見ようとした。

「ふざけるな！オシリス・レッドのお前の為なんぞにそんな時間が取れるか！」

いきなり何を言い出すんだ？コイツ？

「と、東馬くん…。」

翔がすっかりびびっている。だが俺は納得できない。

「四、五枚ほど交換するだけだ。」

「オベリスク・ブルーの俺がデュエルしろと言ってるんだ！さっさと始めるぞ！」

聞く耳持たずか。

「仕方ねえな、行くぞ！」

「デュエル！」

第四話 エリートの戯れ（後書き）

次回は 東馬 VS 万城目の取り巻きA です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2434o/>

遊戯王GX 闘龍の記憶

2010年11月11日18時46分発行